第28回日本臨床微生物学会総会・学術集会

イブニングセミナー1 ES1

日時：2017年1月20日（金）18：20～19：10
会場：第2会場（長崎ブリックホール3F 国際会議場）

耐性菌時代に求められる One Health戦略と 感染症診断法

座 長　迎　寛 先生
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座
呼吸器内科学分野（第二内科）教授

演 者　舘田 一博 先生
東邦大学 医学部 微生物・感染症学講座 教授

長崎の夜景

共催：第28回日本臨床微生物学会総会・学術集会／旭化成ファーマ株式会社

耐性菌時代に求められるOne Health戦略と感染症診断法

東邦大学医学部微生物・感染症学講座

舘田　一博

世界的に進行する耐性菌問題を人間の問題としてだけでなく、共存する動物や生物が生息・定住する環境を含めて地球規模の視点で考える“One Health”の概念が提唱されています。そして今日、“One Health”の方向性のもとに、耐性菌問題に関しても世界の国々が大陸・国境・地域を越えて協力していくことの重要性が様々な提言の中で指摘されています。CDCやWHOの提言はその１例であり、さらに2015年の米国のNational Action Planにおいても耐性菌問題における国際協力体制の確立と強化の重要性が強調されています。この点に関して本邦も、2013年および2015年のG8サミット（英国 北アイルランド、ドイツ シュロス エルマウ）におけるGサイエンス学術会議との共同声明において病原微生物の薬剤耐性菌問題を人類への脅威として提案し、これに対する対策が急務である旨が採択されました。耐性菌問題は世界中の人々が対象となる地球規模の問題であり、その対応には国際社会の理解と協力が不可欠です。幸い、現時点において日本における耐性菌問題は欧米や他のアジア諸国と比較してそれほど深刻なものではないのかもしれません。しかし、世界規模で問題となっている耐性菌がいつ日本に持ち込まれるのか、将来蔓延するのか、私たちは細心の注意を払いながらこの問題と向き合っていかなければいけません。特に正確かつ迅速な診断は感染症診療の基本であり、これにより適切な抗菌薬療法が可能になるとともに不必要な抗菌薬の投与を最小限に抑制することが可能となります。しかし実際の診療の現場において、多くの場合感染症の診断結果を待たずにエンピリックに治療が開始されていることも事実です。最近、病原体抗原を迅速に検出する方法、いわゆる免疫クロマトグラフィー法を用いた迅速検査法が普及し、尿中抗原としての肺炎球菌やレジオネラ、鼻腔・咽頭拭いを用いたインフルエンザ、クロストリジウム・ディフィシル感染症などで広く利用されています。しかし尿中抗原検査では、肺炎球菌検査における小児偽陽性の問題、治癒後も長期間陽性が持続、レジオネラでは *L. pneumophila* 血清群１以外での偽陰性などの問題が存在することも広く知られています。このような状況の中で、病原体のリボゾームL7/L12蛋白を標的とする新しい免疫クロマトグラフィー法の開発が進んでいます。耐性菌時代に求められる感染症診断法の方向性をお示しするとともに、現在進行形の新しい診断法から、近未来の感染症診断法の試みをご紹介させていただきご参加の先生方と議論できればと考えています。